第６回　金沢版地域包括ケアシステム推進協議会における発言要旨

○ この資料は、第６回会議での委員の主な発言を各論点の項目に沿って、事務局において整理したもの。

■総論

意見なし

■在宅医療・介護サービス等の提供体制及び医療・介護の連携のあり方

○　９ページの「ケアプランチェック」という言葉は、国が使用している言葉を用いていると思うが、この言葉ではなく「ケアマネジメント支援」という言葉を使用することもある。

○　お互いに協力してよい方向に進むという点でいうと、チェックという言葉ではなく、支援をしていくという形にしていただいた方がありがたい。

○　11 ページであるが、「(1) 市民への在宅医療の周知」のところの「自宅で療養する」というところと、次のページの「自分のかかりつけ医を持つ」というところであるが、歯科においても、自宅での療養や往診体制は整っていることから、「歯科医師会」の文言も入れていただきたい。

○　11 ページ、12 ページの「１市民の在宅医療に関する理解を深めるための環境づくり」のところで、子どもたちへの教育というのもあってもいいのではないか。

○　11 ページ、12 ページの「(2) かかりつけ医を持つことの周知・啓発」のところであるが、在宅医療の立場でいうと、意思決定支援がとても大切である。意思決定支援についての何か文言があればよいと思う。例えば、自分のかかりつけ医を持ち、かかりつけ医とともに意思決定を話し合うとかを入れられないか。医療の意思決定は、なかなか家族や身内だけで話し合っていてもわかりにくいことであり、介護や医療の関係者と語り会うことが大切である。

○　12 ページの「(3) 地域における在宅医療相談窓口の設置」のところで、市が公の立場でこのような相談窓口を置くのは非常によいと思う。医療機関に設置するとどうしても我田引水的なところも出てくるので、そのような発想が必要である。

○　前の会議で、人が集まるところに相談窓口を設置したり、出前講座を行ってはどうかと発言させていただいた。一つ常設のものがあって、地域に行くという場合が多いと考えられるので、今の段階で常設というのは難しいかもしれないが、これから中期長期の取組の中で、検討をしておいたほうがよいと思う。常設の窓口を市役所や市立病院、福祉用具情報プラザなどの市の施設の中に作れば、市民が常時行きやすい。

○　全国には子どもたちにヘルパーの資格をとらせるという取組がある。履歴書にも書ける金沢独自の資格のようなものがあるとよい。

○　12 ページの「(3) 地域における在宅医療相談窓口の設置」のところで、例えば、ケアプランチェックについて、ケアマネジャーのケアプランチェックのほか、自分の家族のケアプランが妥当なものかをチェックする場があるとよい。また、手軽に「祖母の在宅医療の体制はどうなのか」とかを聞ける身近な常設の窓口があるとよいと思う。医療の現場であると、セカンドオピニオンが当たり前の時代になっていることから、その視点がどこかにほしい。

■地域における高齢者の生活支援・介護予防等のあり方

○　21 ページの「(1) 地域ぐるみの自主的な健康づくり活動の推進」の中にある団体を表彰する制度についてであるが、私のイメージでは団体ではなく地域だと思う。地域包括ケアは地域で取り組んでいかないといけないと思う。団体というようよりも地域、地域や団体と言ってもよいのかもしれない。地域という言葉を入れてほしい。地域で表彰したりすることで、地域での取組を現実化することができる。すこやか検診の受診率もどんどん増えていくのではないかと思う。そうすると 22 ページの「(1) 生活習慣病重症化予防事業への重点的な取組」の方にもよい影響が出ると思う。

○　以前、寝たきりの人を介護していた人を表彰する制度があった。介護保険が始まったころにその制度はなくなった。介護を一生懸命している人に紙１枚でもあげる制度があると、家族の励みになると思うため、検討してほしい。

○　23 ページの「(2) スポーツイベントと連携した健康づくりの裾野の拡大」のところで、スポーツが盛んな大学もあるので、ぜひとも地元の大学と連携をしてやっていくというように、大学を利用してほしいと思う。

○　全国的に小さな市町村の直営の地域包括支援センターに作業療法士や理学療法士などのリハビリ専門職を配置している例は出てきているかと思う。委託の包括では難しいかもしれないが、包括の機能強化についての方向性が示されていることから、リハビリ専門職の配置を検討してはどうか。

○　19 ページの「３「まちぐるみ福祉活動」の担い手確保や見守り対象者の増加への対応」のところで、「見守りネットワークには多様な主体が含まれている」という記載があり、「(1)「まちぐるみ福祉活動」の担い手の確保」のところで、担い手の確保として、「地域の元気な高齢者を主なターゲットとして研修を行う」となっている。民生委員の方やまちぐるみ福祉活動推進員の方々が見守りの中心になっているのは、確かにそうであるし、これからもそうなっていかないといけないのだが、他方で増え続ける見守り対象者をすべてそこで処理するということは、現実的に負担が大変大きいと思う。そのため、多様な主体という言葉が出てくるのだと思う。認知症サポーターの方では若年層の記載があるので、もう少し多様な主体のところを活用するといった書き方があってもよいのではないか。

■認知症を支える体制のあり方

○　地域交流の拠点として、グループホームで実際にカフェ（喫茶）を開設しているところもある。そういうところに地域の方を呼んで、認知症の方が注文をとってコーヒーをいれたり、お菓子を持っていったりすることで、認知症の方やグループホームへの理解が深まると思う。地域交流、相互理解の手法として、各グループホームで２、３か月に１回は地域住民を巻き込み、このような取組をすることを推進してはどうか。

○　27 ページの「(1) 認知症サポーターの養成及び認知症サポーター認定所の拡大」のところで、若年層にも範囲を広げていくということであるが、認知症サポーターの養成を受けることによって、何かちょっとしたメリットがあるというような、若い人たちにインセンティブを与えられるものがあるとよい。

○　祖父、祖母に育てられたお孫さんは、亡くなろうとしている祖父、祖母に対する気持ちが違っている。そういう気持ちを持った若い世代の方がたくさんいると思うので、小中高大学の中の勉強の中にそういう認知症サポーターの講義を入れていただけたらよいと思う。

○　26 ページの「(1) 認知症初期集中支援チームの設置」のところで、「チームは地域包括支援センター等に配置し」となっているが、とても地域包括支援センターが担えるとは思わない。できたら３福祉健康センターに置いたほうが効率的ではないか。

○　27 ページの「(1) 認知症サポーターの養成及び認知症サポーター認定所の拡大」と「(2) 認知症を理解するための地域の自主的な活動の促進」のところで、認知症サポーターの養成も大事であるが、例えば、認知症ケア学会、認知症ケア専門士等の団体の活用も考えてはどうか。そういう団体は地域貢献を謳っており、石川県でも 400 人くらいの規模である。サポーター養成だけでは限界があるので、そういった団体と連携をとってやっていくと認知症の理解も広がると思う。

○　28 ページの「７市民後見人の養成と活動支援スキームの構築」のところで、「後見の市長申立の必要性が高まってきている」との文言があるが、市長申立において、金沢は４親等内の親族調査といった要件があり、ハードルが高い部分がある。申立期間の短縮化に資する仕組みを付け加えてほしい。おそらく、金沢権利擁護センターの体制強化とかになるのではないか。

■重層的な地域包括ケアシステムのあり方

意見なし

■市民への周知・啓発のあり方

意見なし

■金沢市地域包括ケアシステム推進基本構想（案）サブタイトル案について

○　サブタイトルということで、メインのタイトルの地域包括ケアシステムの趣旨を現したものがよいと思う。Ａ案だと、「切れ目ない」という言葉は、医療・介護の世界では一般的であるが、一般の市民には分かりにくいと思う。「高齢者支援」という言葉は、高齢者の何を支援するのかを書かないと分かりにくい。あと、「システム」を作るのではなく、実態を作るのであり、「システム」という言葉はいらない。そこで一案として、「地域で担う高齢者の生活支援の実現に向けて」というのはどうであろうか。やはり「地域」という言葉がキーワードになると思う。「担う」という言葉が妥当かどうかは分からないが。支援するのは生活、生活が一番一般的である。

○　読む人が市民と考えると、「自分たちがもりあげよう」というものが興味深いのではないかと思う。そのため、Ｃ案の「地域力で支え合う金沢を目指して」というような、自分たちが参加してよくなっていくというものの方がよいと思う。

○　34 ページのところで説明があったが、地域包括ケアシステムという言葉は、理解しづらいと思うが、これから介護に関わる中では、その言葉を使って目指すべき方向を説明する機会は増えることになる。その時に、高齢期の医療や介護等についてどのような選択肢があり、どうすればそれを利用できるかということ、そこに込められた具体的な目指すべき方向というものが正しく市民に伝わることがとても大事になると思う。そういうものが伝わるものがよい。

○　地域包括ケアシステムは、高齢者のためだけのものではない。子どもたちや若者、中年みんなを支えるシステムであると思う。地域のシステムということで、私はＣ案がよいと思う。

○　市民の方に地域包括ケアを説明するときに、「住み慣れた地域で自分らしく暮らす」というキーワードでいつも説明している。それでいうと、Ｃ案がよいと思う。「地域力で暮らし続ける」いうキーワードがあるとさらに分かりやすいと思う。

○　みんなよいと思うので、ＡＢＣ案のいいとこ取りでうまいことできないか。